

わたしの旅―山陽道・瀬戸内④

一杉 秀樹

柳井は江戸時代に交易で栄えた町であり、今でも町の一角に往時を思わせる商家群が保存されている。観光案内所もないような静かな町である。

その町から翌朝早く周防大島へフェリーで向かう。周防大島は瀬戸内海の西の端に位置する大きな島で、その西端で本土と橋で繋がっている。島を効率的に廻ろうと東端に位置する伊保田港に上陸するつもりである。柳井港からは松山三津浜までのフェリーが運航されており、早朝一便のみがこの港に立ち寄るのである。

港に降りて通学バス（一般人も利用可能）に乗るべく待っていると前の家から出てきた人が出掛けるついでに乗せてくれることになった。以前はミカン畑をやっていたがやめたとのこと。橋でつながったことで却って人口が流出し、観光客も車での日帰りが増えてしまったことなど島の現状を話してくれた。

この島出身の著名人が二人いる。一人は民俗学者宮本常一、もう一人は作詞家星野哲郎である。ふたつの記念館が並んでいるあたりで車から降りしてもらった。例によって同行者は星野哲郎、小生は宮本常一に興味が傾く。宮本は昭和の時代日本全国をほぼ徒歩歩き、各地の歴史を掘り下げ、膨大な資料を残した偉人である。彼は故郷であるこの島についても多くを記しており、今回はその軌跡を辿ろうとしたのであるが、島は大きく、バスの便は悪く、あまり多くを知ることが出来なかった。

周防大島は歴史の古い島であり、農耕と漁業をそれぞれ別の集団として営んでいたらしい。漁民の一部は遠く対馬に渡り定住したことも記録されている。海の民の行動範囲は想像より広い。島はいくつかの村落に分かれており、それぞれに歴史の後が残るのであるが時間の制約もあり徒歩での探索には限界があった。

海岸線は美しく、昔に繋がるしつかりした歴史を有する土地であるが、それだけでは生活は難しい。漁業は今や廃れ、ミカン畑も殆どが雑木林や竹林に戻ってしまった。宮本がどこかで書いていたように、「進歩に対する迷信が、退歩しつつあるものをも進歩と誤解し、時にはそれが人間だけでなく生きとし生けるものを絶滅にさえ向かわしめつつあるのではないかと思うことがある。」という言葉を変えて考えてみた。